

センター通信

「日本の風」国際シンポジウムに参加して—— 「大衆文化研究」の余白に

稲賀 繁美

和風といえど、かつては独楽と並んで、正月の男子の遊戯の代表だった。現在「日文研」の研究業務上の重点をなしている「大衆文化」とも接点をもつ話題である。だが和風については、いくつかの地域行政の取り組みや、現場の保存会、風職人さんたちの努力はみられるものの、学術研究できちんと対象にされることはないまま推移してきた。現在、学術振興会の外国人枠の研究費支給を得て、日文研の外来研究員となっているセシル・ラリが二〇一八年十二月二〇—二一

日、パリの国立美術研究所講堂を会場に、二日間にわたり、前代未聞の国際和風シンポジウムを開催した。一般公募により発表者を募った本会議は、英語とフランス語とを使用言語として営まれた。筆者はラリ氏の経理上の受け入れ教員を拝命している関係で、風についてはまったくの門外漢ながら臨席を所望され、学術発表の片棒も担がせていただいた。本国際シンポジウムは科学研究費補助金事業であり、受け入れ機関としての日文研のロゴも開催通知に明記されており、日文研における学術動向とも無縁ではない。機能強化費の名目で運営される「大衆文化研究」とは別枠ながら、以下簡略に報告する。

一、遊戯と絵柄と

会議の副題には「諸技藝の交差点」とあった。実際、凧は単一の研究対象をなすというよりは、さまざまな関心の交錯するなかに浮上する。制作の現場、美術史的な分析や文学などへの派生。子供の遊戯としての意味づけ。大衆による受容と史の変遷。保存・振興事業の現状。海外の現代美術動向との連動。現在の保存活動動向の社会的な分析―。これら様々な観点から、各国の研究者や愛好者が報告をもちより、蘊蓄を傾け、熱心な討議がかわされた。

和凧の起源は中国南部に求められるようだが、海路を伝う伝播経路からは逆に東南アジアや台湾との関係も無視できない。長崎では阿蘭陀経由の意匠も無視できない。シーボルトの御用絵師だった川原慶賀は長崎の年中行事を詳細に描写しているが、「おくんち」と並んで凧あげの風物も忘れずに描出されている。クラウディア・マラーはその絵柄や意匠について、文字や抽象的な記号に至るまでの多様な語彙を、独自の記号論的分類を駆使して詳細に分析した。帆船航海術の旗信号とも関係がありそうだが、実際には別系統なのだろう。

いわゆる浮世絵、錦絵版画にはとりわけ一九世紀にはいる

と、凧あげの情景が盛んに描写される。民衆図像に関する図版を満載した研究書・啓蒙書の著者としてフランス語圏でよく知られるブリジット・小山リシャルは、凧が遊具にとどまらず、役者の似せ絵が禁止されると凧の絵柄に変装した事例や、同時代の政治的風刺が凧の絵柄に託された例に言及した。また凧の錦絵で英語圏で著名な収集家のポール・チャップマンが、自らの収集を持参し、凧笛の実演なども交え、演壇を往復しつつ報告した。デイヴィッド・カーンは自ら「青山博物館」Blue Mountain Museumを開設した著名な凧収集家だが、武者絵の図像学について精確かつ該博な知識を披歴し、弁慶と牛若、桃太郎、金時や渡辺の綱の鬼退治といった定番の意匠が、近代を迎えるや日清戦争期以降、日本人の制服へと軍装を改め、やがて田川水泡「のらくろ」などへと変奏を遂げてゆく推移を浮彫にした。カーン氏本人には理論化の志向はなかったが、これらは記号学的には「間―絵画性」Interpictorialityの実践例、「シケチ重層写本」palimpsesteの活用例であり、こうした研究志向は、従来の錦絵版画研究の枠を拡大しつつ刷新する契機となる。

そもそも凧を揚げるとは、いかなる遊戯なのか。宮崎康子は幼児の自我の発達過程において、ままならぬ外界との調整



図版1 自ら収集した風の絵柄を分析するデイヴィッド・カーン氏
(撮影・稲賀)

を経験する遊戯として、風あげの特異性と意義を強調した。カイヨワの遊戯の分類には収まりきらない浮遊性が風には付随する。カイヨワ自身も、風あげは上空の「天」に向けた探究であり、特異な大気条件を「聴診」することで、操縦者は自己の肉体を脱して自己の現存を投企 *projeter* する、と述べているのは、宮崎氏も指摘するとおり。

稲賀は文学における風を論じるという課題を授かったが、宮崎氏の発表を受け、与謝蕪村の句、「いかのぼり 昨日の空のありどころ」一句に限定して、風あげ体験の詩論 *poétique du cerf volant* を試みた。一六五〇年代の幕府の「烏賊幟」禁令により幟の名称が「風（タコ）」に転換したが、「いかのぼり」は俳諧では正月の季語として延命する。だが、なぜ中空に舞う風は昨日の、そして過去の光景を想起させるのか。天と地との間をあてどなく揺蕩う、はかない存在、風頼みで人間の側の制御を超えた浮遊物を糸で操る頼りなさ、さらには未知の世界への通い路としての風。そこに人びとは、魂の浮揚する姿を託したのではなかったか。

二、喧嘩風…祭礼と観光資源と

シルヴィ・ブロッソは、新潟・白根の大風を闘わす祭りを

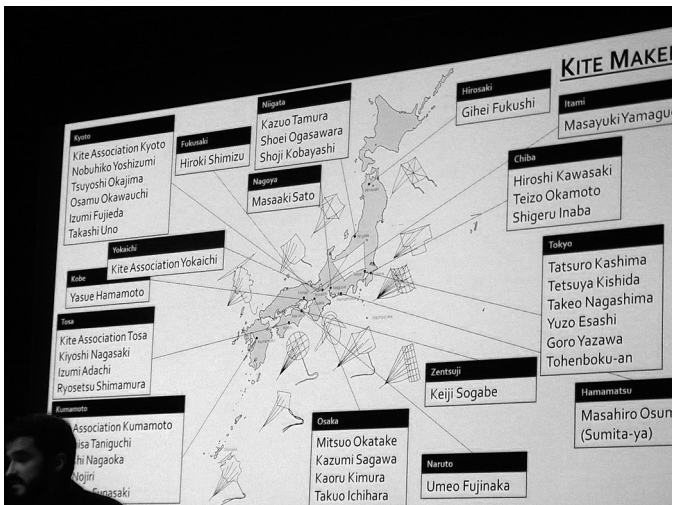
話題とした。河川と用水路に囲まれた輪中の地理的な特殊性、街道の開発にとまらぬ集落の自己意識の変遷にともない、巨大な風競技が集落をまとめる韌帯と化し、地域の維持刷新の要となる。その白根では町をあげて風と民具を中心とした博物館を運営している。セシル・ラリはこの事例を分析した。祭礼にあつては風のみならず仮設の飾り物は、最後には壊して捨てるのが一般だろう。それが翌年への継承を司る歳月の運行と回帰に不可欠だからだ。だがだとすると、風を保存するという博物館の志向は、風をめぐる行事の本性とは背馳しないだろうか。筆者はそうした素朴な質問を試みたが、この問題は、竹や和紙、綱引きの縄にいたるまで、風制作の原材料が現地供給でなくなりつつある現実、祭りの将来への存続とも裏腹の事態なのだという。

風はどこまで、いかにして日本文化と関連づけて海外で認識されてきたのか。オリヴァー・ペンジャミン・ヘマーレは、商標や絵葉書、マッチ箱の意匠など幅広く対象を踏査し、欧米における日本表象のなかでの風を分析した。二〇世紀前半を迎えても、ジャンク船を風で曳航するといった荒唐無稽な異国趣味が、商標や舶来品広告図像にはなお生き残っ

ており、そこでは現実と空想のみならず、日本と中国さらには東南アジアも混交をやめない。スヴィトラナ・シールズはロシア語文化圏に視点を移し、マルク・シャガールの空中に浮かぶ人物像に注目し、地上のシャガールと手を取り合つて宙に漂う愛人ベラの姿には、日本の奴風に由来する想像力が働いているのでは？という仮説を展開した。まだ立証、とまではゆかない恨みはあるが、確かに二〇世紀前半にパリに移住した放浪の藝術家たちが、空に漂う魂に憧れ、そこに郷愁を託したことは否定できない。これは評者による蛇足だが、思えば風の代わりにニューヨーク摩天楼上空に飛行機 *Point d'interrogation* (「疑問符号」) を飛ばせ、パリのセーヌ河上空には飛行船 *Dirigable* (「操作可能号」) を浮かべたパリ在住の銅版画家・長谷川潔は、シャガールとも同時代人。またフランクリンの雷雨のなかでの風あげ実験を、フィラデルフィアで避雷針の記念碑に仕立てたイサム・ノグチは、パリ時代にシャガールとも交友があった。敗戦後イサムの友人となる岡本太郎もまた、機械は嫌いだと公言しつつ、巨大な極彩色の飛行船 *dirigable* に、龍か奴風よろしく目玉を付けて、大空に浮かべる夢を共有していた。

三、風と現代美術

スコット・スキナーは風関係書籍出版のため「龍基金」Drachen Foundationを立ち上げた自称「タコキチ」のひとりだが、現代にいたるまで、世界各地で現代美術家たちがいかにあらたな風を次々に発案し空に浮かべてきたかの委細を、圧倒的な図像と情報量とともに提供した。幾何学的な立体造形からNASAが開発した宇宙風まで、話題は拡大してゆく。質疑応答では、自前の動力を必要とせず、しかし地球の重力なくては機能しない風という浮遊装置の流体力学的な機構に関する専門的な議論も展開された。つづくステファノ・トリノは具体美術連盟の吉原治良やミッシェル・タピエが企画した「空の祭典」Sky Festival（一九六〇）に端を発し、一九九〇年代までドイツ人パウル・オイベルを主導者として世界の著名な現代藝術家たちが風制作を競った事実を、克明なドキュメントによって復元した。白髪一雄からラウシェンバークに至る藝術家たちにとって、美術館という白い立方体while cubeの壁の内部に作品を安置するのではなく、自らの創造を大空に羽ばたかせようという熱意は、けっして一過性のもものではなかった。翻って、一九七〇年代を迎えた日本では都市化の進行と電線が張り巡らされた住宅環境への配慮か



図版2 日本の風製造者と形態分布・ステファノ・トリノの発表
(撮影・稲賀)

ら、小学校でも風あげが推奨されるどころか禁止され、この世代で風を作り、それを大空へと揚げる技術の伝承も、プツンと途絶えてしまったことが、教育史の歴史的事実として確認された（宮崎康子氏の報告）。

大衆の遊戯だった風あげは、バブル経済の末期に、美術的な祝祭の演出媒体として世界的な脚光を浴びた。いまや過去に属するその実験的壮挙の成果総括も含め、二〇一〇年代を迎えて、風はようやく学術的研究や、行政的保存事業の対象へと変質を遂げつつあるようだ。

最後の発表者となったアニー・クローストルはそうした現状を受けつつも、二〇一八年の第一八回リヨン現代美術ビエンナーレの主題が *le monde flottant* つまり「浮世」とされ、野外で多くの風が揚げられた実績を扱った。「タコ街道プロジェクト」の島袋道浩もフェスティヴァル参加者のひとりだったが、若い日本の作家には、日本列島の軌を離れて欧州で風に創作の夢を託する創意も見られる。この将来展望はそのまま総合討議に持ち越される。

不肖・稲賀はこの討議の司会進行役を仰せ遣ったが、議論を受け、ひとつ指摘した。中国語の風は鳥に風や笛といった「息吹」に由来する漢字を組み合わせた語彙からなる。風は



図版 3 会議休憩時間中 演壇に並べられた収集品を囲んでの意見交換（撮影・稲賀）

「氣」を乗せつつ、大氣中を漂うわけだが、「息吹」とはヘブライ語のルーアハ、それを訳したギリシア語がブネウマ、インドではブラーナ、そしてブネウマのラテン語訳がスピリトゥス。つまり息吹＝風は精霊に結び付く語彙であり、その魂の申し子が風でもあった。「天」と「地」のどちらにも属さず、しかし受動と能動の間で両者を繋ぐ「霊」。三位一体の玄義に肖うならば、天（神）と地（キリスト）との間を媒

介する「精霊」としての風の存在論、あるいは神学が、洋の東西を跨ぐ全球的な比較文化的視野で、いまこそ期待されているのかもしれない。

議論は懇親会会場に場を移して続けられた。地下鉄サン・ポールの駅近く、「二十のワイン」と題する若い日本人経営の小さな店。画廊を兼ねており、パリ在住の日本人写真家、清真美（きよし・まみ）による日本の風職人に取材した写真の展覧会が開かれていた。同じ作品展は、日文研でも、セシル・ラリ氏の evening seminar に併せ、実施が予定されている*。

（国際日本文化研究センター教授）

（二〇一九年一月六日稿）

* The Kites of Shirone - How to Make a Small City Known Worldwide
は二月七日に実施された。

「近代中国革命の思想的起源——日本からの建国思想の受容を中心に」第一回共同研究会の感想

楊 際 開

二〇一八年四月二八―二九日に亘って、小生の主催による共同研究会「近代中国革命の思想的起源——日本からの建国思想の受容を中心に」の第一回研究会が行われた。初日は戦争史家の姜克實氏と中国外交史家の岡本隆司氏に基調講演をお願いしたので、お二人の講演の主旨や意味を中心に感想をしよう。

初日には姜克實氏と岡本隆司氏による基調講演が行われた。まずは姜克實氏の講演の「近代化におけるナショナリズム、アジア主義の位相——日本のアジア主義と革命」という演題における問題提起を取り上げたい。姜氏から見れば、日本のアジア主義と近代中国革命は、いわば「国家的情念」から生まれた双子のような関係にあるようだ。「アジア主義には近代と伝統にまたがる二つの側面があり、近代の側面（ナショナリズム）は中国の革命、近代国家の成立をもたらしたが、伝統的側面は、戦前の「大アジア主義」的国家関係をつ